

伊勢山皇大神宮創建一五〇年奉祝大祭



創建一五〇年

横浜の歴史と軌を一つに歩む

横浜は、幕末の開港によって歴史の舞台へと躍り出ました。それより文明開化の先駆けとして、外来の文化や文物が流入し、急激な近代化が推し進められました。

明治三年、神奈川県知事の井関盛良（いぜきもりとめ）は、人々が西欧化により日本の美しい国柄を見失わないようにと、その精神的な支柱となる象徴が必要であると考えました。そして、それに相応しい神社として、かつて武蔵国の国司が伊勢より勧請したと伝わる古社を選び、これを横浜の総鎮守とすることにしました。横浜港や新開地を一望できる伊勢山の地を選び、この神霊を遷座し、御社殿の造営整備を行いました。これが伊勢山皇大神宮の創建となります。伊勢山皇大神宮は、令和二年五月十五日に創建百五十年を迎えました。この記念事業として、これまで御本殿・神楽殿・参集殿の造営などの境内整備、祭祀舞の創作、また、往時の伊勢への旅路を再現して伊勢参りを行い、大前では献茶式や演武奉納式を奉仕するなど、崇敬者と共に奉祝行事を執り進めてまいりました。現在、市内中心の各所へは、当宮の御社紋である桜の記念植樹を行っております。これからも引き続き、各種の記念事業を予定しております。私どもは、これらの記念事業を通して、御神威が横浜と共に悠遠でありますことを願うものです。

永世の祈りを舞に

当宮の創建以来の歳月を振り返るとき、幾多の困難を克服して、神社護持と横浜の今日の発展に尽くされた先人への敬意と、神霊への感謝を表し、神恩の悠遠と祭祀の真意を顕現するため、創建百五十年の佳節を機に、祭祀舞を創作しました。

伊勢山皇大神宮の創建百年に際して、明治天皇の第九皇女である東久邇聡子さまがお詠みになられた和歌に、元宮内庁式部職楽部主席楽長の池邊五郎氏が作曲と作舞を行いました。

舞装束の意匠は、伊勢山の桜と横浜の海を象徴し、舞の振りは、横浜港を出港する船の様子をモチーフに、将来への希望と力を表現しています。神霊の恵みにより、人々の豊かな将来と横浜の発展・繁栄を祈る舞です。

伊勢山の舞

いせやまの 神のめぐみに
ももとせの さかへしあとを
いはふ今日かな



御本殿の御造営

平成三十年竣工

創建百五十年記念事業のなかでも、最も重要となる事業は、御本殿の御造営です。御本殿は、御祭神のお鎮まりになる殿舎であるとともに、信仰の中心となる建物であり、創建以来の歴史を貫く祈りの形象でもありました。

現在の御本殿は、創建より三代を数えるものとなります。社殿形式は神明造りによるもので、神代の神殿の様相を今に伝えていきます。

御本殿の材には、伊勢の神宮の古材が用いられています。神宮では二十年毎に「式年遷宮」が行われますが、その第六十二回の式年遷宮（平成二十五年）の際に、社殿の古材の譲与を受けました。また、この御造営に於いて伊勢の神宮と同様に、茅葺屋根の御社殿が都市部で実現できたのは、特筆すべきことです。

当宮の御祭神は、いにしえに伊勢より当地へ勧請されたと伝えられています。永い歳月を経て、その神霊が、神宮の古材によって造営された御社殿へお鎮まりになり、「関東のお伊勢さま」の名に相応しいお姿となりました。

神霊は、新たな神殿に鎮まることで、その神威が再生され、力を増すと信仰されてきました。この度の御造営により、御祭神の御神威が益々高揚され、そのお力を帆に受けて、横浜は更なる未来へと船出することでしょう。



御造営の風景

御本殿が竣工するまで、多くの祭事や行事が執り行われました。



上棟祭
(平成 30 年 8 月 19 日)



地鎮祭
(平成 30 年 3 月 4 日)



神宮古材譲与
(平成 26 年 11 月 14 日)



奉祝祭
(平成 30 年 10 月 2 日)



正遷座祭
(平成 30 年 10 月 1 日)



お白石持ち行事
(平成 30 年 9 月 15 日)

御社殿の回顧

時代ごとの祈りが込められた御社殿

当宮の最初の御社殿は、遷座の翌年の明治四年に竣工しました。

神奈川県による当宮創建の告諭には、「壮大高麗の宮殿を創立し、皇祚永久国家の鎮撫を祈り、人民をして常に崇敬瞻仰に注意せしめんとす」とあります。

かつて、横浜の中心部から仰ぎ見れば、伊勢山の丘から、この御社殿が見守っていました。横浜市民にとって、それは心の拠り所であり、また都市の誇りでありました。

各地からの移住者で構成された、新興の都市である横浜にとって、この御社殿と、そこに鎮まる神霊は、共同体の絆ともいえる存在でした。「ハマっ子」と呼ばれる意識の誕生にも、当宮の創建が大きく影響したといえます。

文明開化の町に聳える、神代を思わす伊勢山皇大神宮の御

社殿は、横浜絵と呼ばれた錦絵や、横浜土産の彩色絵葉書の題材ともなりました。

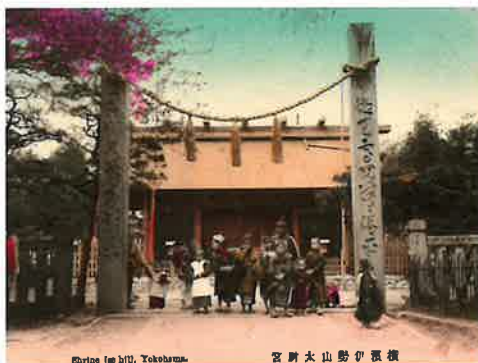
当時の国際港都横浜の象徴であった御社殿ですが、残念ながら大正十二年の関東大震災に罹災し、失われてしまいました。

御社殿が再建されたのは、昭和二年でした。この御造営は、昭和天皇の御大典の奉祝事業として行われ、遷座は即位礼の前夜である、昭和三年十一月九日に斎行されました。

翌日の横濱貿易新報（現・神奈川新聞）には、「伊勢山皇大神宮ゆふべ遷座式 澄み亘る晩秋の空の下厳かに」「最も荘厳なる奏樂裡に神代ながらの遷座式を行つた」とあります。

御社殿の再建は、ほぼ同時期に竣工した神奈川県庁と共に、横浜の震災からの復興の象徴でした。以来、横浜大空襲の猛火も潜り抜けて、約一世紀の間、横浜の町を見守り続けてきました。

明治4年竣工の社殿



明治中期頃の境内風景（彩色絵葉書）



本殿と拝殿（彩色絵葉書）



横浜野毛伊勢山従海岸鉄道蒸気車ノ図（横浜開港資料館蔵）

この度の御本殿の御造営にともない、旧御本殿は、平成三十年の仮遷座祭の後に、東日本大震災で被災された宮城県石巻市の鹿島御児神社へ、譲与致しました。令和元年十月十四日には、遷座祭が斎行され、その御本殿となりました。

関東大震災で再建された当宮の旧御本殿が、三陸の地で今新たな姿を輝かすことになりました。御本殿の再建が、震災十年を迎え復興の途にある人々にとって、一筋の光明となることを願って止みません。

御社殿とは、造営や修造を繰り返しながら守り伝えられ、人々の息吹を受け、その時代その地域に相応しい、祈りの場へと成長して行くことになります。まさに御社殿は祈りの継承と言えます。

昭和2年竣工の社殿



本殿と拝殿
(彩色絵葉書)



遷座祭
(昭和3年11月9日)

五月十五日・二十二日 創建一五〇年奉祝大祭

明治三年四月十五日(旧暦)、港を一望する丘に、伊勢より勧請されたと伝わる御神霊が遷座されました。横浜総鎮守、また神奈川県宗社たる伊勢山皇大神宮の創建です。

この遷座の祭礼は、当時日本一の規模の祝祭となり、東洋一の港都の繁栄を世に示すと共に、当宮を横浜の守護神として人々の心に刻みました。

それより何時しか一五〇年の星霜を経ました。この令和三年の例祭に合わせ、五月十五日(例祭当日)・二十二日の両日に、創建一五〇年奉祝大祭が厳粛に斎行されました。

当宮の創建とは、はまっこ気質のルーツとも言われ、かつては開港記念日と共に、横浜の誕生に関わる日とされました。横浜を見守り、共に歴史を紡いできた当宮の一五〇年。この節目は、終着点ではなく、更なる航海の始まりとなります。

どうか眩いばかりの御神威が、灯台の如く正しき未来へと、この横浜を導く事を、ただひたすらに祈念致します。



五月十六日 神輿渡御

横浜の今を象徴する『みなとみらい』への神幸

午前九時、神職の警蹕（神のお出ましに掛けられる先払いの声）が響く中で、御祭神が胴寸二尺八寸・重さ一六〇貫の神輿へとお遷りになりました。これより横浜の現在を象徴する場所、みなとみらい二十一地区への神輿渡御が始まります。

コロナ禍の下、掛け声も高らかに神輿を担ぎ、勇壮に練り歩くことは叶いません。神輿は、この晴れの日の為に用意された檜の台車へと据えられました。

先頭を行く神職と巫女が道の辻々を祓い清めつつ、揃いの半纏も凛々しい崇敬者らに守られて、伊勢山の丘より、横浜総鎮守の御神霊が街へと降りていきます。

それは明治三年の祝祭の再現であり、また今の横浜の繁栄を照覧頂き、御神威で街を満たす為でもあります。ウォーターフロントの未来都市を、神輿がゆつくりと、そして力強く進んで行きます。目指す御旅所は、横浜港を一望する臨港パーク。そこで神前に流鏑馬が奉納されます。

五月十六日 流鏑馬

臨港パークに於いて流鏑馬を神前に奉納

流鏑馬とは、日本の伝統的な騎射の技です。その実戦的な内容により、中世から東国武士のならいとされてきました。

流鏑馬は、単に武芸の鍛錬にとどまらず、神前へ奉納されるものでもありました。源頼朝が鶴岡八幡宮へ奉納して以来、神事としての流鏑馬も、各地で盛んになっていきます。

此度は臨港パークに神幸された大神さまへ、清和源氏の技を継承する、大日本弓馬会によって奉納が行われました。

射手は、的を射る時に、天下泰平・五穀豊穰・万民息災を念じます。この的とは、討ち払うべき災いの象徴でもあるのです。最後の凱陣の式で、合戦の首実験の作法で的が検分されるのも、そのことを表しています。

また、弓の弦の音は鳴弦と呼ばれ、古来より邪気や病魔を祓う力があると考えられてきました。

高らかに響き渡る弦の音、そして的を貫く鏑矢。これらには、コロナ禍鎮静の切なる願いが込められているのです。



五月二十二日 奉納行事

『浦安の舞』



昭和十五年の日本国建国二六〇〇年を奉祝して、昭和天皇の御製を神楽舞としたものです。

その歌には、世界平和を願う切なる祈りが込められています。

舞姫の衣装は、十二単から発想されたもので、扇そして神楽鈴を手に舞われます。

『親子で親しむ 日本の神話』



神奈川県神社庁の教化委員会が、日本神話の普及と伝承を目的として行うデジタル紙芝居の活動です。

プロジェクトの映像と雅楽の演奏に合わせ、語り部が神々の物語を演じます。

地域イベントや教育機関での出張公演も行っています。

『和太鼓グループ 彩ーsaiー』



東京大学のサークルを前身とする、男性のみのプロ和太鼓集団です。

令和元年ラグビーW杯での選手入場演奏をはじめ、TVCMや映画でも活躍しています。

公演は国内に止まらず海外でも行われ、世界中で高い評価を受けています。

『箏男 koto men 大川義秋』



若くして津軽三味線北村流の師範となり、邦楽界の権威ある各賞にも輝いた箏奏者です。

伝統を重んじる一方で、自らデザインをしたアイドル的な衣装を身に纏い、TVや動画配信でも活躍する、箏のパフォーマーとしての顔を持ちます。